

番号	No.1
会場	東京会場・大阪会場
業種	鉄道事業者，設計コンサル
ページ	標準全体
条文番号	
質問	本標準は，いつから適用になりますか．また，現在，耐震標準も改訂作業が行われていると聞いているが，耐震標準との組合せ・運用方法について，もう少し具体的に説明して下さい．
回答	<p>土留め標準への移行は，国交省から「平成24年度中に新規に設計されるものからの適用を目処」とされておりますが，耐震標準も平成24年度中に改訂される見込みです．そのため，現時点では，設計地震力の取扱いなどについては，現行の耐震標準（H11）が適用されます．</p> <p>今回の土留め標準は，現時点での耐震標準改訂案との整合を図っており，主として改訂耐震標準と組み合わせ，適用されることを想定しております．そのため，現行耐震標準（H11）と組み合わせた場合については，危険側の設計とはならないと考えておりますが，計算上，場合によっては合理化になる場合や逆に安全側となる場合もありますので，適用には十分ご注意ください．</p>

番号	No.2
会場	東京会場
業種	鉄道事業者
ページ	3 ページ
条文番号	「1.1.1 適用の範囲」
質問	ボックスカルバートは今回改訂されず，開削トンネル標準の改訂時に合わせて検討という説明があったが，開削トンネル標準やその他，性能照査型へ移行していない設計標準について，今後の予定を教えてください．
回答	まだ性能照査型に移行していない設計標準のうち，「鋼とコンクリートの複合構造物」については現在，進行中です．その他の構造物については国交省殿と調整中です．

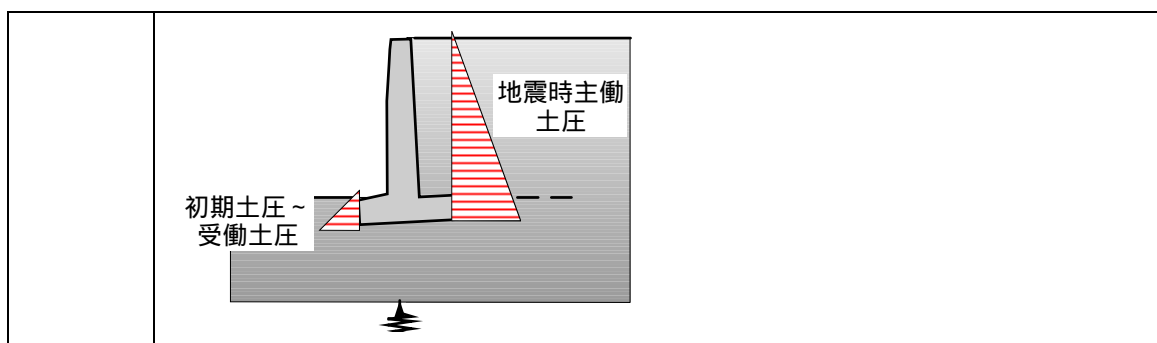
番号	No.3
会場	東京会場
業種	設計コンサル
ページ	標準全体
条文番号	
質問	設計をサポートするプログラム，設計計算例の公開の予定はありますか？
回答	<p>設計計算用のプログラムとしては，設計計算用プログラム「Design-RRR，JREP」をバージョンアップ予定です．なお，現状でも構造解析のみであれば対応可能です．</p> <p>設計計算例については講習会で紹介しましたが，現在発刊に向けた準備を進めています．プログラム，設計計算例ともに耐震標準の改訂にあわせて，販売予定です．</p>

番号	No.4
会場	東京会場，大阪会場
業種	鉄道事業者
ページ	37 ページ
条文番号	「3.2 要求性能」
質問	なぜ土構造物や擁壁だけ「性能ランク」という区分けがあるのでしょうか？
回答	<p>土構造物や擁壁の場合，以下に示すように橋梁とは異なる特性があるため，土構造物全体に要求する性能を先に考える必要があります．</p> <p>基礎構造物，コンクリート構造物と異なり，個々の部材の性能が全体系に影響を及ぼすことが少なく，構造全体で性能を定義する必要があるため</p> <p>土構造物の性能は，材料の種類，締め固め等の施工管理の品質に大きく影響される．性能照査設計でも，土構造物の重要度等に応じてある程度，仕様（材料，施工管理のレベル）を定める必要があるため</p> <p>のり面工，排水工等は具体的な構造設計がされることは少なく，土構造物全体に要求される性能，重要度に応じて使い分けるため</p> <p>また，土構造標準には適合みなし仕様として，性能ランク ， ， の盛土の主要な仕様・構成（盛土材料，路盤工，のり面工，排水系統，支持地盤）を示しています（土構造標準 p.46，解説表 2.6.6）．ここに示す仕様・構成は性能ランク が省力化軌道用土構造標準(H11)，性能ランク が建造物標準(S53)，性能ランク が土構造標準(H4)に相当します．</p>

番号	No.5																										
会場	東京会場，大阪会場																										
業種	鉄道事業者																										
ページ	37 ページ																										
条文番号	「3.2 要求性能」																										
質問	<p>抗土圧橋台の耐震補強を行う際に，求める性能を「耐震性能」で決めていたが，橋台背面の土構造物について「性能ランク」で表記されています．耐震標準で使われている「耐震性能」と，土構造標準で使われている「性能ランク」の違いは何でしょうか？そもそも対比できるものなのでしょうか？考え方を教えて下さい．</p>																										
回答	<p>質問 No.4 にも示したように，性能ランクとは土構造物全体に要求する性能であるため，土構造標準に示される性能ランクと，耐震標準に示される耐震性能は考え方が異なり，1 対 1 に対応するわけではありません．しかしながら，土構造物に要求される変形レベルと，橋台等の基礎の安定レベル（L2 地震時）を整理すると以下ようになります．</p> <div style="text-align: center;"> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>土構造物全体に対する 要求性能の考え方</p> <p>土構造標準 (H19)</p> </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>橋梁および高架橋のL2地震動に対する 要求性能の考え方</p> <p>基礎標準 (H24)</p> <p>耐震標準 (H11)</p> </td> </tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%; text-align: center;">性能ランク <small>省力化軌道標準H11</small></td> <td style="width: 15%; text-align: center;">変形レベル1</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">安定レベル1</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">復旧性で検討 (性能レベル1)</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">←</td> <td style="width: 30%; text-align: center;">(耐震性能)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">性能ランク <small>建造物標準S53</small></td> <td style="text-align: center;">変形レベル2</td> <td style="text-align: center;">安定レベル2</td> <td style="text-align: center;">復旧性で検討 (性能レベル2)</td> <td style="text-align: center;">←</td> <td style="text-align: center;">耐震性能</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">性能ランク <small>土構造標準H4</small></td> <td style="text-align: center;">変形レベル3</td> <td style="text-align: center;">安定レベル3</td> <td style="text-align: center;">安全性で照査</td> <td style="text-align: center;">←</td> <td style="text-align: center;">耐震性能</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">変形レベル4</td> <td style="text-align: center;">安定レベル4</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td></td> <td style="text-align: center;">-</td> </tr> </table> <div style="display: flex; justify-content: space-around; width: 100%;"> <div style="text-align: center;"> <p>↓</p> <p>L2に対する 土構造物の 変形レベル</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>↓</p> <p>L2に対する 基礎構造物の 安定レベル</p> </div> </div> <p>例えば，現行耐震標準に準拠して構築された橋台の背面盛土を補強する等の場合には，上記を参考に決めて下さい．</p> </div>	<p>土構造物全体に対する 要求性能の考え方</p> <p>土構造標準 (H19)</p>	<p>橋梁および高架橋のL2地震動に対する 要求性能の考え方</p> <p>基礎標準 (H24)</p> <p>耐震標準 (H11)</p>	性能ランク <small>省力化軌道標準H11</small>	変形レベル1	安定レベル1	復旧性で検討 (性能レベル1)	←	(耐震性能)	性能ランク <small>建造物標準S53</small>	変形レベル2	安定レベル2	復旧性で検討 (性能レベル2)	←	耐震性能	性能ランク <small>土構造標準H4</small>	変形レベル3	安定レベル3	安全性で照査	←	耐震性能		変形レベル4	安定レベル4	-		-
<p>土構造物全体に対する 要求性能の考え方</p> <p>土構造標準 (H19)</p>	<p>橋梁および高架橋のL2地震動に対する 要求性能の考え方</p> <p>基礎標準 (H24)</p> <p>耐震標準 (H11)</p>																										
性能ランク <small>省力化軌道標準H11</small>	変形レベル1	安定レベル1	復旧性で検討 (性能レベル1)	←	(耐震性能)																						
性能ランク <small>建造物標準S53</small>	変形レベル2	安定レベル2	復旧性で検討 (性能レベル2)	←	耐震性能																						
性能ランク <small>土構造標準H4</small>	変形レベル3	安定レベル3	安全性で照査	←	耐震性能																						
	変形レベル4	安定レベル4	-		-																						

番号	No.6
会場	東京会場
業種	鉄道事業者
ページ	44 ページ, 47 ページ, 127 ページ
条文番号	「3.5 安全性」, 「3.7 復旧性」, 「抗土圧擁壁の安全性」
質問	擁壁では L1 地震時は安全性を照査することで復旧性の照査に代えてよいとのことでしたが, この時の安全性の照査指標は常時と同じと考えてよいのでしょうか?
回答	<p>1 章に記載しているように, 擁壁は土構造物の付帯構造物として用いられる場合が多いため, 「土構造標準」と同様に安全性の照査の一つとして, L1 地震に対する壁体の破壊, 基礎の安定の照査を行います。ただ, それぞれの性能項目に用いる限界値は基礎標準, RC 標準と同じであり, 常時とは異なります。127 ページの【解説】および 128 ページの解説表 8.2.4-2b に書いてあるように,</p> <p>壁体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地震時 (L1 地震動): 損傷レベル 1 を設計限界値 <p>基礎</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地震時 (L1 地震動): 安定レベル 1 を設計限界値 <p>となります。</p>

番号	No.7
会場	大阪会場
業種	設計コンサル
ページ	72 ページ
条文番号	「4.4.2.3 地震時土圧」
質問	地震時土圧の作用のさせ方は, 旧抗土圧標準のままでよいのでしょうか?
回答	<p>旧抗土圧標準では, 地表面以下には慣性力を作用させませんでした。その後の検討により, 背面盛土からの地震時土圧は三角形分布に近いことが分かったため, 本標準より背面盛土全体に慣性力を作用させることにしました。一方, 前面受働抵抗については旧抗土圧標準では考慮しないことが一般的でしたが, 前面土被り部が十分に締め固められている場合には前面受働抵抗が期待できることが分かりました。そのため, 本標準では適切な埋戻し材料の選定および施工管理が行われている場合に限り, 前面受働抵抗を水平地盤ばねとしてモデル化することにしました (p.104~105 参照)</p>



番号	No.8
会場	東京会場
業種	鉄道事業者，設計コンサル
ページ	75～76 ページ
条文番号	「4.4.2.3 地震時土圧」
質問	<p>質問：降伏震度が「2次すべり以下」となる場合，簡易算定法のラインは，震度0～2次すべりを結んだラインとはならないのでしょうか？</p> <p>質問：現行の耐震標準で適用されていた水平震度の上限値（$k_h=0.7$）を解除することであるが，擁壁の断面や大きさが今までよりも大きくなることはないのでしょうか？</p>
回答	<p>回答：p.76 にありますように，「永久作用による土圧（主働土圧）と設計水平震度における地震時土圧を水平震度に対して線形的に補間した値を簡易な地震時土圧として用いてよいものとする」とあるので，抗土圧擁壁や抗土圧橋台の最大応答震度が修正物部岡部式から求まる2次すべり発生震度よりも低い場合は，2次すべりを結んだラインで問題ありません。</p> <p>ただし，本来であれば修正物部岡部式で求めた地震時土圧を用いることが重要で，ここで示した方法はあくまで簡易手法であり，地震時土圧を安全側（大きめ）に評価していることが重要です。</p> <p>回答：p.75 にありますように，従来の水平震度の上限値は，背面盛土の軟化によりそれ以上の加速度が伝播されにくいことを便宜的に考慮したものでした。しかしながらこの措置により，3次すべり面が水平震度0.7前後で発生する場合，わずかな土質諸数値の違いで土圧が大きく異なる問題がありました。これを考慮し，本標準より水平震度の上限値を解除しました。一方，過去の検討事例を考慮し，3次以上のすべり面を考慮しないことにしたので，水平震度0.7以上の大震度において地震時土圧を合理的に評価できるようになりました。</p>

番号	No.9
会場	東京会場

業種	鉄道事業者
ページ	p.100
条文番号	「5.9 補強土橋台のアプローチブロック」
質問	一般的なセメント改良土の物性値が示されたが、事前に施工試験等により得られた値を用いてよいのでしょうか？
回答	<p>「5.9 補強土橋台のアプローチブロック」には、粒度調整砕石を少量のセメントで改良した「セメント改良礫土」の諸数値の設計用値が示されています(解説表 5.9.3)。もし、事前に粒調砕石を入手し、施工現場と同じセメント改良率で作成した供試体に対して三軸試験を実施した場合には、その値を用いても構いません。ただし、実際の施工条件(締固め管理、セメントの配合)と異ならないように注意が必要です。</p> <p>また、解説表 5.9.3 に示した諸数値は、セメント改良率が 2.5% (60kg/m³~80kg/m³程度の改良)を想定しています。これよりも高いセメント改良率で施工した場合は高い強度が期待できます(付属資料 30 参照)。</p>

番号	No.10
会場	講習会后
業種	鉄道事業者
ページ	150 ページ
条文番号	「8.3.5.2 盛土補強土擁壁の安全性」
質問	内的安定抵抗係数の使用方法についてですが、解説表 8.3.5-3 に示されている値をどのように用いれば良いのでしょうか？例えば、(解 8.3.5-3)に内的安定抵抗係数 f_{ri} がありますが、永久荷重と列車荷重の組み合わせで照査をする際は、解説表 8.3.5-3 のどの値を用いれば良いのでしょうか？
回答	解説表 8.3.5-3 は、主たる作用に対する内的安定抵抗係数の値が示してあり、永久作用と変動作用を別々に考慮するというものではありません。安全性の照査において永久作用が主たる作用の場合には $f_{ri} = 0.5$ となり、列車荷重を考慮するような作用の組み合わせを用いる場合には $f_{ri} = 0.67$ を用います。

番号	No.11
会場	講習会后
業種	鉄道事業者
ページ	150 ページ
条文番号	「8.3.5.2 盛土補強土擁壁の安全性」
質問	内的安定抵抗係数 f_{ri} と、補強材の引き抜けに関する抵抗係数 f_{rg} についての質問

	<p>です。解 8.3.5-4 で f_{rg} を乗じて、さらに解 8.3.5-2 で f_{ri} を乗じることになっており、ダブルカウントではないでしょうか？ジオテキの引き抜け抵抗が常時の場合で $0.5 \times 0.5 = 0.25$ しか見れないというのはあまりにも安全側すぎませんか？</p>
回答	<p>内的安定抵抗係数 f_{ri} は内的安定の照査においてすべり面に沿って発揮されるせん断強度のばらつきを考慮した安全係数となっており、f_{rg} はジオテキスタイルの引抜け抵抗に対する安全係数となっており、両者は本質的に意味が異なります。また、解説表 8.3.5-3 (安全性) や解説表 8.3.5-6 (復旧性) に示したように、主たる作用によって抵抗係数の値は異なり、例えば L2 地震動に対する検討では f_{ri} と f_{rg} 共に 1.00 になります。</p>

番号	No.12
会場	大阪会場
業種	ゼネコン
ページ	157 ページ
条文番号	「8.3.7 盛土補強土擁壁の構造細目」
質問	<p>解説図 8.3.7-2 で基礎に栗石を配置するとありますが、必ず栗石を用いる必要があるのでしょうか？また、目地について、伸縮目地と収縮目地の材質（規格）は示されているのでしょうか？</p>
回答	<p>壁体基礎の支持力という観点で言えば、栗石を用いるのが最も良いのですが、「8.3 切土補強土擁壁」で述べたように近年、栗石は入手困難であるので、例えばクラッシャーラン（RC-40 等）を用いても問題ありません。また、目地については抗土圧擁壁の施工等で一般に用いられる材質のもので問題ありません。</p>

番号	No.13
会場	大阪会場
業種	鉄道事業者
ページ	161 ページ
条文番号	「8.3.8 盛土補強土擁壁の施工管理」
質問	<p>解説図 8.3.8-1 (p.161) の「盛土工完了の状態」と「壁面工」を比較した場合、具体的な性能の違いを解説してください。</p>
回答	<p>「盛土工完了の状態」は壁体に剛性のない補強土擁壁に相当します。一般には、各高さ毎の補強材の引抜きに対する照査が必要となります。本標準では、照査の前提（8.3.3）で補強材配置を決めており、またすぐに「壁面工」を打設することを想定しているため、この段階での照査は不要です。また、「壁面工」の施工完了時には剛な壁体が存在することになるため、各層の補強材引抜</p>

	<p>の照査は不要です。</p> <p>なお、仮設構造物等で短期間「盛土工完了の状態」で供用する場合、補強材の長さについては、前述した「各高さ毎の補強材の引抜きに対する照査」に加えて、(1)設計敷設長の延長、(2)背面盛土材料の内部摩擦角()を安息角とした位置まで補強材を延長、を行うのが一般的で、詳細な検討が必要です。また、供用期間、盛土高さ、列車速度等の諸条件に応じて、(1)壁面勾配を設けること、(2)吹付けモルタル等による表面被覆(ジオテキスタイルに対する紫外線や火災からの防護のため)を行う必要があります。</p>
--	---

番号	No.14
会場	大阪会場
業種	設計コンサル
ページ	163 ページ
条文番号	「8.4.1 切土補強土擁壁」
質問	解説図 8.4.3-1 にはのり面勾配が 1:0.3 と示されているが、安衛法との関連性はどうか？
回答	<p>労働安全衛生規則第 356 条・第 357 条</p> <p>岩盤または堅い粘土からなる地山</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 90 度以下：5m未満 ・ 75 度以下：5m以上 <p>その他の地山</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 90 度以下：2m未満 ・ 75 度以下：2～5m ・ 60 度以下：5m以上 <p>切土補強土擁壁は 1:0.3 (水平面に対して 73.3 度) を基本としているため上記規則に抵触するわけではなく、必要高さ(掘削深さ)毎に地山補強材を打設します。ただし、施工直後は安定していても、そのまま放置すると掘削面の安定性は徐々に低下するので、掘削後は直ちにのり面保護工を実施する必要があります。</p> <p>また、切土勾配を解説図 8.4.3-1 に示す 1:0.3 (急勾配) ではなく、1:0.3~1:0 (中間勾配) の範囲で、格子砕工等と地山補強材を組み合わせた「切土安定化工法」も適用可能です。勾配を緩くすることで、掘削土量が増えるものの、施工時の安全性の向上や、地山補強材の仕様を簡素化できる場合があります (p.166 参照)。</p>

番号	No.15
会場	大阪会場
業種	設計コンサル
ページ	179 ページ
条文番号	「8.4.7 切土補強土擁壁の構造細目」
質問	壁体背面の透水材は、必ず透水マットとする必要があるのでしょうか？砕石等の透水材は使用できないのでしょうか？
回答	従来のもたれ式擁壁の構造が示すように、壁体背面に栗石を用いると耐震性が著しく低下することがわかっています。加えて近年は栗石の熟練工も少ない現状であることから、これらを勘案して排水性の観点から透水マットの使用を示しております。砕石の使用については栗石と同様のことが懸念されることから、使用は認めておりません。

番号	No.16
会場	東京会場
業種	鉄道事業者
ページ	p.175 , p.340
条文番号	「8.4.5.2 切土補強土擁壁の安全性」、 付属資料 20：地山補強材の引抜き特性について
質問	地山補強材の極限周面摩擦力度（ ）は、背面地山の土質諸数値（ c 、 ）から求める方法と、(付属資料には) N 値から求める方法が示されていますが、実際にはどちらの方法で求めるべきでしょうか？
回答	2 通りの方法のうち低い方の値を用います。特に、土被り厚が深い場合は N 値から求める方法、浅い場合は土質諸数値（ c 、 ）から求める方法の方が小さくなります。 ただし、地山のばらつきの影響を考慮して、いずれの方法でも実際の極限周面摩擦力度（ ）を安全側（低めに）評価することが多いです。そのため、当該地山において地山補強材の引抜き試験を行い、極限周面摩擦力度（ ）を確認することが重要です。地山特性によっては、当該地山での引抜き試験に基づいたを求めた方が経済的になる場合があります。

番号	No.17
会場	大阪会場
業種	鉄道事業者

ページ	163 ページ
条文番号	「8.4.1 切土補強土擁壁の設計の基本」
質問	自立性地山（引留め式）、非自立性地山（地山補強式）の評価において、地山の粘着力を考慮しているのでしょうか？その際はどのように行うのでしょうか？
回答	切土補強土擁壁は、実在する地山を対象としており、一般には粘着力を考慮しません。粘着力の評価を行う場合には、 ボーリング調査 地盤材料試験 現存する地山の逆解析 などから総合的に判断する場合があります。安定に及ぼす粘着力の影響は非常に大きいので、粘着力の評価に際しては注意が必要です。

番号	No.18
会場	東京会場
業種	鉄道事業者
ページ	201 ページ
条文番号	「9.2.4.2 抗土圧橋台の安全性」
質問	橋台の支承部については、地震時の線路直角方向の検討が必要とのことであるが、設計応答震度はどのように考えればよいのでしょうか？
回答	一般的な設計条件であれば、線路直角方向に対しては、背面盛土が無い橋脚の状態に比べて、地震時の動的応答は抑制されます。そのため、動的な応答・増幅を無視し、地表面設計地震動の時刻歴波形の最大加速度から、支承部の設計応答震度を算定できます（考え方の詳細は、改定中の耐震標準に記載予定です）。

番号	No.19
会場	大阪会場
業種	設計コンサル
ページ	211 ページ
条文番号	「9.2.5.3 液状化の可能性のある地盤の抗土圧橋台」
質問	液状化地盤上の橋台 質問：PL 値 > 20 の場合等（突出杭となる場合） →杭頭より上方の橋台に作用する地震時土圧は、慣性力設計時と同じでよいのでしょうか？液状化によって背面盛土の応答は小さくなるため、土圧はほとんど作用しないのではないのでしょうか？

	質問 : 仮に背面土圧がさほど作用しないのであれば, 応答値算定法は「エネルギー一定則」ではなく, 非線形スペクトル法の方が妥当ではないでしょうか?
回答	<p>回答 : ご指摘のように, 支持地盤が液状化すると, 橋台背面盛土の応答は小さくなりますが, 小さいながらも土圧は作用すると考えられます. 耐震標準では, 液状化地盤における地表面地震動を示しており, 非液状化時よりも応答加速度は小さくなっておりますので, これを用いて地震時土圧を算定してください.</p> <p>回答 : 液状化時も少なからず土圧が作用するとともに, 前面方向への累積性はあるため, 橋脚の所要降伏震度スペクトルを準用するのではなく, 本標準の橋台の動的解析モデルを適用する必要があります.</p>

番号	No.20
会場	大阪会場
業種	設計コンサル
ページ	P197
条文番号	「9.2.3 抗土圧橋台の設計応答値の算定」
質問	<p>質問 : 現行では, 橋脚と同様, 杭頭からの相対変位を考慮していると思われるが, 盛土天端からの変位を考慮しなくてもよいのでしょうか?</p> <p>質問 : また, 基盤に入力された地震波は, 地盤を介して背面盛土にも作用すると思われるので, 応答変位法をやる場合には, 壁体背面にも地盤変位を作用させるべきではないでしょうか?</p> <p>質問 : 応答変位法で考慮する地盤変位は, エネルギー一定則で求めた応答震度まででよいのか?</p>
回答	<p>回答 : ご指摘のように背面盛土の影響があるので, 今回の標準では考慮するように変更しています (配布 PPT の抗土圧橋台の 13 枚目および付属資料 23 参照)</p> <p>回答 : 背面地盤からの作用は, 地盤変位の影響も含めて, 地震時土圧としてモデル化しています. よって, 「地盤変位を作用させなくてよい」のではなく, 「暗に地盤変位の影響も考慮されている」と解釈できます.</p> <p>回答 : 応答変位法で考慮する地盤変位は, L2 地震時の自由地盤の最大応答変位となります. 組み合わせる慣性力は L2 地震時の非線形化を考慮した最大応答震度となります. 橋台については, 橋脚のような固有周期比に応じた位相差の影響が明らかになっていないため, 安全側に両者を最大値同士で組み合わせることとさせていただきます.</p>

番号	No.21
会場	大阪会場
業種	設計コンサル
ページ	218 ページ
条文番号	「9.2.6 抗土圧橋台の構造細目」
質問	橋台の排水工 質問：排水が重要とのことですが，どの程度の幅になれば，排水工が必要となると考えればよいのでしょうか？
回答	目安として，単線橋台では側方からの排水が期待できるので，排水の設置を省略できることとしています．その他の考え方の目安をP 2 2 1に記載していますので，ご参照ください．

番号	No.22
会場	東京会場
業種	設計コンサル
ページ	241 ページ
条文番号	「9.3.6.6 特殊構造のセメント改良補強土橋台」
質問	GRS 一体橋梁は，具体的な計算モデルの設定方法（作用のモデル化など）がわかるような照査例（計算例）を示していただけののでしょうか？
回答	補強土橋台の技術を適用していますので，地盤ばね定数や補強材バネ定数等については，補強土橋台と同様の設定となります．なお，今後補強盛土一体橋梁の設計マニュアルを作成する予定です．

番号	No.23
会場	大阪会場
業種	鉄道事業者
ページ	250 ページ 付属資料 2
条文番号	-
質問	付属資料 2（ボックスカルバート，p.261）で，以前の抗土圧標準には 10.3.2（液化化土層中の場合）がありましたが，欠落してしまったのでしょうか？
回答	耐震標準（1999）の制定時に，耐震設計に関することは耐震標準に準拠することとなっていることから，今回再掲するにあたり削除しました．

番号	No.24
----	-------

会場	東京会場・大阪会場
業種	鉄道事業者、設計コンサル
ページ	標準全体
条文番号	-
質問	他の標準（土構造，抗土圧等）の改訂をとりこんだ全文（省通達の部分）は公開されているのでしょうか？ また，土構造標準から補強土構造物を廃止することですが，本が変わるのでしょうか？
回答	<p>通達文については鉄道局長から各地方整備局長に通達され，管内の鉄道事業者に通達されており，公開はされていません．</p> <p>また，今回，土留め構造物標準を制定するにあたって，土構造標準，抗土圧標準については削除部分が通達されています．土構造標準の書籍については次の版以降の対応となります．</p>

番号	No.25
会場	東京会場・大阪会場
業種	鉄道事業者，設計コンサル
ページ	標準全体
条文番号	-
質問	土留め構造物の維持管理については，どの標準を適用するのですか？
回答	<p>維持管理標準につきましては構造物が多岐にわたることから，必ずしも設計標準と一対一に対応はしておりません．したがって，現状では，土留め構造物の維持管理標準につきましては未定です．土構造物編，基礎・抗土圧構造物編を参照していただきたいと思います．</p>